

巻頭言

THE HYDROGEN PROJECT  
- A PUBLIC EDUCATION SCIENCE PROGRAM -

(財)エネルギー総合工学研究所  
WE - NET センター  
福田 健三

2月にロスアラモス国立研究所から一通のファックスが届いた。水素エネルギーの社会への浸透を図るためには、一般社会の支持、合意、協力が基本要件であるが、これらの人々の水素エネルギーに対する認識は甚だ貧弱な状況にある。ついには DOE および NASA の援助のもとに、水素エネルギーに関する社会教育プロジェクトを発足させるべく準備中であるが、WE - NET とも協力関係が出来れば有り難い、という趣旨であった。

ロスアラモスは既に予備的インタビュー調査を実施して上述の状況を裏づけるデータを得ており、今回その一部が添付されていた。その一部を紹介してみよう。

1. インタビュー対象者 22人  
学歴：高卒～大卒、年齢：38～75才
2. 公共輸送機関(バスなど)の燃料として水素をつかうことについて：
  - (1) 良いと思うか。  
YES・6、NO・8、分からない・8
  - (2) 水素が自動車燃料としてつかえることを知っているか。  
YES・1、NO・21
  - (3) 水素自動車燃料としての水素の利点を知っているか。  
YES・0、NO・22
  - (4) 水素は危険と思うか。  
YES・22
3. 水素はどんな点で危険と思うか(複数可)。  
爆発・18、放射能・16、毒性・8、火災・20、分からない・2

母集団が小さすぎる等の問題は別にしてもまことにさびしい結果である。とりわけ放射能の危険性を上げた人が少ないのが驚きである。水爆からの連想であろうか。我が国ではもっと違う結果が得られるであろうか。筆者は大差ないと想像する。

ここでロスアラモスが計画したのが標題の HYDROGEN PROJECT である。米国社会には、教育というものについて、日本とは大分異なった精神的インフラストラクチャーがあるのかも知れない。教育人口の率から見た場合、わが国の学校教育の水準はおそらく米国より高いと思われるが、こと社会教育(ロスアラモス流では、public education)については、問題意識も実践も見劣りがする。まして、国家

が支援するプロジェクトとして社会教育にとり組むという発想は、少なくとも従来の国家プロジェクトの枠組みには入っていない。しかし水素エネルギーのように、社会のインフラにかかわる技術分野については、技術開発と並行して、望むらくはそれと有機的連携を保ちながら、当該技術に対する社会の理解・支持・合意・協力を得るための社会教育プログラムも立案、実施するべきなのかもしれない。歯切れの悪いのは、筆者がたずさわっている WE - NET の枠組みでは、具体的イメージがにわかには浮かんでこないためである。

ひるがえって、産官学を横断的に組織している HESS のような組織は、アカデミニズムを基軸とする学会的活動に加えて、社会教育にも一定の責任を負って良いのではないかと思うが、いかがなものだろうか。